
ぼくと大輔と由実

北夏ティーチ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくと大輔と由実

【Nコード】

N6483P

【作者名】

北夏ティーチ

【あらすじ】

ぼく達3人は仲良し組だった。ぼくが父さんの転勤でこの地を離れるまでは。大人になって忘れかけてたあの頃の記憶。それぞれの人生の先に待ちうける運命とはなにか……。

Scene 1 賭け

「おー！ 大輔！ このカブトでかいじゃん！ どこで見つけた？」

「そのクヌギの木の樹液吸つてるとこ捕まえたぜ！」

「大輔くんすごい！ 私にも見せて！」

大輔がこの夏一番でかいであろうカブトムシを捕まえてぼくはあせっていた。今年の夏休みに、ぼくと大輔でどっちが大きいカブトを捕まえられるか競争しているのだ。競争といっても特になにがあるわけでもなく、由実が気まぐれで提案しただけのことだった。

ぼくと大輔と由実の3人は小学校6年生で同じクラスだ。いつも仲良し3人組と言われている。三人とも近所ということもあって、小学校に入って外で子供達だけで遊べる年齢の頃にはいつも三人で遊んでいた。

大輔はクラスでもリーダー的存在で、スポーツ万能、成績優秀、そしてこれまた女の子にモテるときたもんだ。髪は短すぎず長すぎず、目鼻立ちも整っていて大人になればまさしくイケメンと言われるだろう。いや、もう言われてるんだけど。

由実はこれまた美人でかわいいと学年中で有名だ。肩まで伸ばしたまつすくな黒髪、切れ長の目に茶色い瞳、ぼく達とよく外遊びしてるのに日にも焼けず、胴よりも長いであろうスラットした長い足。勉強もスポーツもそこそこで男子にモテないわけがない。

ぼくはというと可もなく不可もないたって平凡で、周りからは大輔と由実の金魚の糞と思われているのかも知れない。まるでお似合いカップルの引き立て役みたいじゃないか。

「吾郎ちゃん、大輔くんに負けちゃうよ〜」

「夏休み終わるまであと三日もあるじゃんかー」

「三日も？」

大輔と由実がクスクス笑っている。

「まあ頑張れよ吾郎！」

「そうよ吾郎ちゃんまだ三日もあるもんね！」

朝来た時は朝もやで薄暗かった神社の境内も今は太陽に照らされた地面がムンムンしている。カブト捕りに絶好の早朝ウルトラタイムを過ぎてぼく達は解散した。

由実は気まぐれだった。去年はセミの数を競う勝負だった。一昨年はクワガタの大きさ勝負。その前はなんだっけ……。もちろん由実には参加しないで楽しそうに見てるだけ。

そんな感じでぼくと大輔の勝負は毎年続いている。そしてぼくは大輔に勝ったためしなかった。でも今年には負けられない。小学校最後の夏休み。そして大輔と由実と最後の夏休み。

中学校からは父さんの転勤で、ぼくは東京の中学校に通うことになるらしい。

大輔と由実といつも遊んだこの北海道を離れるのは残念だけど、ぼくにはどうしようもない。でも最後の夏休みぼくは賭けにでた。もしこの勝負に勝ったら……。由実が気まぐれではじめたこの勝負に勝ったら……。

告白しよう。

Scene 2 記憶

わたしは思い出す。あの楽しかった夏休み。

高校を卒業して美容専門学校に通い、わたしは美容師への道へと進んだ。

高校ではボーイフレンドもできたこともあるが、将来の夢に向かって就職するまでは恋はあきらめた。そして25歳になった現在も彼氏はいない。

就職してからは毎日が忙しすぎた。夜遅くまでカットやパーマの練習。彼氏をつくる暇も出会いもない。

遅くに帰宅し、コンビニで買った弁当を半分ほど残し、お風呂に入って寝る。この繰り返し。

眠りにつくまで最近思うことがある。そうあの楽しかった小学校時代。

忙しさにまぎれて思い起こすこともなかった淡い記憶。深い海の底で冷たくなった淡い記憶を温もりと共に引き上げたのは彼だった。

そう一週間程前に彼を見たのだ。

職業柄かかせないおしゃれの為に、洋服や化粧品、アクセサリーを買いに行った先週の休日の火曜日だった。

買い物済ませ疲れた体と思考がウインドウショッピングを拒否してるのを確認しアパートに戻ろうと新宿駅に来た時だった。向かいのホームに彼はいた。小学校6年以来会ってはいないがわたしにはわかった。初恋の相手を忘れるわけがない。

真新しいダークスーツに身を包み、右手に真新しい鞆を下げ携帯電話で話しこんでいた。ときおり誰もいない前方に向かっておじぎをしているところを見ると、彼は営業マンで顧客と話してるのかも

しない。

彼は輝いて見えた。

あれほど憧れた美容師になったわたしはというと、まるで疲れたおばさんだ。内面からにじみ出る光りがまるで違う。

そして彼は数分後に来た電車と共に消えた。

それだけだった。

彼を見て以来、わたしは眠りにつくまでの少ない時間を、あの淡い小学校時代の記憶で埋め尽くす。まるで今の疲れた現実を追い出さんばかりに……。

わたしは彼に気持ちを伝えなかったことを後悔してるのだろうか。わたしの気持ちに彼はあの時気付いてすらいないだろう……。

Scene 3 別れ

夏休み最後の日の夕方、ぼく達は神社の境内でそれぞれが一番大きいであろうカブトムシを見せ合った。見比べるまでもなくあきらかだ。ぼくはまた、今年も負けた。

オレンジ色に包まれた神社の境内がぼくの夏の終わりを告げるように見えた。

「吾郎残念だったな！ また来年頑張れよ」

「そうよ吾郎ちゃん！ 私達来年中学生になるけどまた勝負できるじゃない。まあ来年からは中学生だし、虫捕りつてわけにもいかないからもつと大人な勝負考えておくけど」

ぼくの気持ちも知らないで由実は大輔と笑い合いながら神社の石段を降りて行く。

「もう最後なんだ」

二人が石段の途中で立ち止まりぼくの方を振り向く。

「ぼく来年から東京の中学校へ通うことになったんだ。父さんの転勤の都合で」

「嘘だろ吾郎！？ 聞いてないぜそんなこと！」

「吾郎ちゃんそれ本当なの！？」

「うん。本当だよ。黙っててごめん……」

大輔と由実はぼくを責めるでもなく、悲しそううつろな表情だった。しばらくの沈黙が何分続いたろう、いや何秒だったのかもわからない。

父さんの転勤を二人に隠してたのは、ぼくの覚悟の現れだった。初めて勝負に勝って最後の夏休みを告白で終わらせる。それがぼくの思い描いた最後の夏休み。

大輔に勝ちたかった。毎年夏休みの勝負に大輔が勝って、由実が

褒め称えるのに嫉妬した。ただでさえお似合いのカツプルに見えるのに、由実が大輔に向ける笑顔や仕草が耐えられなかった。

卒業式まであつという間だった。

大輔と由実はお別れの日にはぼくの家まで来てくれた。

「吾郎！ 元気でな！ 離れてたってまたいずれ会えるぜ。たまには電話くれよな！」

「吾郎ちゃん……」

大輔は笑顔だった。大輔らしくてこっちが泣けてきた。

由実は何か言いたいのか、泣き顔でひっくひっくして声が出てこない。

「あのね…… ひっく！ あのね吾郎ちゃん…… ひっく！ 私…… ひっく！」

会話にならないとみて、母さんがタクシーの運転手に行き先の空港を告げた。父さんは先に東京に行って引越しの準備をしている。

「元気でな吾郎！！ あっちでも頑張れよー！！」

「そっちも元気でなー！ 大輔ー！ 由実ー！ ばいばーい！！」

タクシーの後部座席の窓から、二人が見えなくなるまでぼくは手を振った。

由実が手を振るのがやっとのようで、いつまでも肩がひっくひっく上下していた。

Scene 4 発見

あれから時間さえあれば、新宿駅へとわたしは足を運んだ。でもあの日以来彼の姿を見つけることはできなかった。

見つかるわけがない。ここは東京なのだ。北海道の片田舎の駅ではない。休みのたびに新宿駅へ通い彼の姿を探した。今日もふらふらと人ごみの中をさまよい、ヒールで足が痛い。次はスニーカーにしようと思った。

もし彼を見つけたとして、もし彼もわたしを見つけたとして……そんなことを考えるとついおしゃれしてしまう。歩きにくいヒールで1日中あてもなく新宿駅の中で彼を探した。

3人で遊んだ夏休み。カブトムシの大きさの勝負が最後だっただけ。その前の年は……駄目思い出せない。忘れちゃった。

中学、高校とそれなりに楽しかったし、新しい友達もできた。でもあの二人より仲の良い友達はできなかった。友達に紹介されたボーイフレンドは、付き合ったのか付き合っていないのかわからぬまま自然に終わっていた。

彼に気持ちを伝えていたら今とは違った人生だったろうか。小学生の初恋が大人になるまで続くとも思えない。でも今のわたしは、あの時の後悔を引きずって、何もかも忘れるように、がむしゃらに突っ走ってたのかもしれない。

小学校6年生の淡い片思いだったのかな。いやきっとそうだろう。

携帯で時間を確認し、夕方だと気付く。最後に周りを見渡して帰ろうとホームに立ったその時だった。

彼がいた。

前に見た時と同じ向かいのホームに前と同じダークスーツに身を包み、携帯で電話している。

わたしは走った。階段を降りて向かいのホームに走った。何人とぶつかったかも記憶にない。ただひたすら彼を追いかけて走った。

向かいのホームに着いた時、彼の姿はなかった……。

遅かった。彼が乗ったであろう電車は今わたしの目の前を横切っている。

来週の火曜日また来てみよう。今と同じ時間に。いっぱいおしゃべりして……。

スニーカーはやめた。

Scene 5 不安

ぼくは中学生になった。

まず東京に来てびっくりした事は、建物の数と車の数、人の数、何もかも多い。

北海道のしかもさらにド田舎に住んでたぼくには、新鮮で不安だった。

入学式も終わり数ヶ月経ったが、クラスの数が多すぎて同学年ですら名前を把握できずにいる。1学年13クラスなんてでたらめだ……。あっちじゃせいぜい5クラスだ。まだ自分のクラスメイトの名前すら把握していない。

「へ〜お前吾郎って名前なんだ。しぶい名前してんな」
ぼくに初めて声をかけてくれたのは、吉田高志だった。ぼくは廊下側のはじっこの後ろから3番目。彼は4番目、ぼくの前の席だった。

「吉田君だつてしぶい名前じゃん」

「吉田じゃなくて高志でいいよ」

これが高志との出会いだ。

高志はなんとなく大輔に似ている。まあ外見はあまり似てるわけじゃないが雰囲気似ている。気さくな感じで、それでいて馴れ馴れしいわけでもない。

「吾郎って北海道から来たのかよ！ いいな〜俺北海道行つたことないんだよな〜」

「なんもないよあるのは自然だけ。自然といつても辺ぴな田舎町で世界遺産みたいな自然があるわけじゃないよ」

「いやいや自然じゃなくてさ、食い物うまいんだろ？ カニにウニにイクラ、うまそうだな」

高志は自然には興味がないらしい。カブトムシなんて見たことあるのだろうか。

「まあ食い物も普通だと思うよ。ぼくは東京の食い物とかの方が興味あるよ」

「じゃあ今度俺が東京のうまいもん食わせてやるよ」

こうして高志が初めての友達になった。

高志は浅草育ちの生粋の東京人だ。半年もすると高志はぼくを帝釈天というところや花屋敷に連れて行ってくれた。帝釈天で草団子を食べさせてくれたときには（こいつ本当に中学生か？）と思ったが、草団子はうまかった。

慌しい中学校生活で大輔や由実とはなかなか連絡は取れなかった。まだぼくは携帯もないし家の電話でわざわざ電話するのもなんか照れくさい。数回の手紙のやりとりが中学3年にもなればなくなり、年賀状だけとなった。

それぞれが新しい環境の中で奮闘してるんだろう。ぼくも高校受験でそれなりに忙しかった。

可もなく不可もない高校にぼくは合格し、大人の道へと進んでいた。

ただ卒業と同時に高志はぼくの側から離れていった。

Scene 6 再会

わたしは今ホームに立っている。先週彼を見つけたこのホーム。今日彼は現れるだろうか。わたしは朝からずっと待っていた。先週は夕方に彼は現れた。

少し肌寒い季節だったが、わたしは一番のお気に入りの真っ赤なワンピースと、少し高いヒールのサンダルを履いて、できる限りのおしゃれをした。

化粧はちよつと濃かったかもしれない。ワンピースに合わせて真っ赤な口紅が派手だったかも。でも仕方ない。劇的な再会で気合が入って当然だと自分を誤魔化すことにした。

たしかにわたしは変わったかもしれない。昔はこんなに派手でじゃなかった。

小学校の頃はまだ控えめだった。でも中学から高校へと進むにつれ、わたしは変わった。思いでを引きずり、それを忘れようとする葛藤が心の底からあふれるようだった

そんなやりきれない毎日と繰り返される当たり前の毎日。美容室に就職した当初は内面より外見を磨いた。女性らしくありたい、綺麗でありたいと。

それがいけなかったのか美容師としての技術は追いついてこなかった。

5年も働いてるのにいまだにアシスタント。お客の髪は切らせてもらえない。シャンプーやカラーリングなど補佐的な仕事ばかりだ。それでもクビにならずに働かせてもらってる以上文句は言えない。営業時間が終わればカットの練習などの毎日。

そんな毎日の中に彼が現れたのだ。

駅のホームでちょこつと見かけたただけだけど、私の変化のない毎日にはとてつもないスパイスだった。

しばらく待っても彼は現れない。

今日は帰ろうかと思つたその時だった。わたしの前方10メートル程前に彼は立っていた。後ろ姿で気付のが遅れたたのдарう。間違いない彼だ。

あぶないところだった。まだ電車は到着するまで時間がある。このチャンス逃したら二度と会えないかもしれない。あてもなく駅を探し歩くのはもうごめんだ。

どんどん彼の後ろに電車を待つ人の波が押し寄せてくる。早くしなきゃ！。

私は人波を押し分け大輔に近づいていった。割り込みされたと思つた中年の太つたハゲのサラリーマンに睨まれたがかまいやしない。今度はPTA会長でもやってるような、キツネみたいなメガネをしたおばさんにさえぎられる。まるでスネオのママだ。

なにかスネオママに文句を言われたらしいがわたしには聞こえない。早くしなければ電車が来てしまうので、かまってなどいられない。

ようやく人の波をかき分け彼にたどり着いた。

そしてわたしは彼に呼びかける。

「大輔！」

Scene 7 変化

ぼくは高校からはあまり友達ができなかった。

高校3年の頃には、だんだんふさぎ込むようになり、学校以外では部屋に閉じこもることが多くなった。パソコンのインターネットと同じ趣味の友達は見つかったが、現実から逃げているだけなのだろうか。

ネットの友達に声をかけられ、実際にオフ会とやらに参加して友達らしい人もできたが、かなり年上で気が付いたら関係は自然消滅していた。

そういえば今年の大輔の年賀状に、大学は東京の大学に行くと言っていた。

経済学部に行くらしいが、大手商社でやり手の営業マンにでもなるのだろうか。

由実との年賀状のやり取りはもうなくなっていたが、大輔の年賀状に由実の近況が書いてあった。

「由実は結婚したらしい」

書いてあったのはそれだけだった。

高校3年で結婚とは、まずできちゃった婚か……。

気丈で真面目な由実の子供をおろす選択肢はなかったのだろう。避妊を怠ったのは本人達に責任があるだろうが、由実は愛を貫いたのだろう。

大輔の年賀状には書いてないが、高校も退学したはずだ。

ぼくとの別れの日には由実が言いかけていた事を思い出す。

あれはなんだったのだろう。飛行機の出発時刻があと1時間でも、

いや30分でも遅ければ母さんはタクシーの出発を遅らせに違いない。

ぼくが変わったと同じように由実も変わったのだろうか。

いや、ぼくは変わってはいない。小学校の時から変わってはいない。

周りがぼくを遠ざげるだけなんだ。

高志もそうだった。

もし北海道に帰ることがあれば由実の家に行ってみよう。

あの時言いかけた言葉を教えてくれるなら聞いてみよう。

そしてぼくも聞いてみよう。

「由実は知っていたの?」と……。

Scene 8 驚愕

「大輔！」

わたしは叫んだ。大輔は自分の名前を呼ばれたのか、別人の大輔がどこかにいるのかと思っているのか、周りをキョロキョロしていた。

そしてようやくわたしの視線に気付いた時、もう一度わたしは呼んだ。

「大輔……」

「え」と……。どちら様ですか？」

大輔はわたしだとまったく気付いていない。不思議そうな目でわたしのつま先から頭の上まで視線を這わせている。

「あのう、ちょっとお話があるんです！ お願いだから聞いてください！」

「といつても電車がそろそろ来ますし……。しかも私はあなたを知りませんし……」

「わたしよ。吾郎よ」

「はい！？ どちらの吾郎さんですか？」

「小学校まで一緒だった吾郎よ！ 大輔と由実とわたしでいつも仲良し3人組だった吾郎よ！」

大輔とわたしは近くの喫茶店に入った。

ウェイトレスが注文を聞きに来るまでお互いしゃべれずにいた。気まずい空気を吹き消すかのようにお互いコーヒートを注文し、コーヒートを一口飲んだところで大輔が口を開く。

「びつくりしたよ。まさか吾郎だったなんて……。でもどうしたんだその格好？　まるでニューハーバーにいるホステス？　みたいだぜ」

やはり気合を入れすぎたか。赤を強調しすぎたのがいけなかった。さつき冷静に喫茶店のガラス越しに自分を見るとまさしくテレビにでも出てきそうな、ニューハーフトレント、いやオカマタレントじゃないか。

「もうちょっと地味なかつこにすればよかったね。ごめんね大輔……」

「別に派手でも地味でもいいんだけどさ、もしかして吾郎って性同一性障害になったのか？」

「まあそんなところね。おどろかしてごめんね！」

いや違う。なったのではなく物心ついた時からそうだった。小さい頃から女性を好きになったことはない。小学校までは恋とかじゃなく漠然と男の子が気になるだけだった。

わたしと大輔と由実と3人で遊んでいても、わたしの目は大輔になぜか視線がむけられた。それが初恋だなんて気付かなかった。

大輔に告白しようと賭けにでるまでは……。

Scene 9 羽化

自分のことを呼ぶのに「ぼく」から「わたし」に変えたのはいつだろう。

専門学校に入る頃には服装も変わっていた。中学校で高志や友達が離れていった理由も分かる。わたしを気味悪がってたのだ。思春期で多感な年齢だし理解しろと言っても無理だろう。かかわり合うなどといったところか。いじめまで発展しなかったのは、やはり高志の存在があったのかもしれない。中学2年までは高志と仲良くしていた。

わたしが美容室に就職が決まった時、母は喜んでくれた。

高校卒業と同時に自分の本当の心が女だということを打ち明けた。高校までは服装は男子の格好だったし、母も最初はまともに聞いてくれなかった。

女物の服装で専門学校に通い出してからは、母も徐々に理解してくれた。

父だけは今も絶縁状態だ。

当初面接は幾度となく落ちた。

テレビに出る完璧に女性としか見えないニューハーフと違って、わたしは整形するお金もなかった。女物の服装で髪を伸ばし、ちょっと濃い目の化粧で誤魔化すだけだが、誰が見てもすぐに男だとわかるだろう。

体型だけは気をつけた。太らないように食事を減らし、夜コンビニで買った弁当を半分残して、残りを朝食にする。

でもインターネットで知り合った、性同一性障害の友達の紹介で

今の美容室に働かせてもらった。わたしがいつまでもアシスタントなのはお客さんの目もあるのだろう。

でも働かせてくれるだけありがたい。いつか一人前の美容師なる希望だけはあきらめずに、練習だけは頑張るつもりだ。

最近は何んだかすごく疲れている。夜遅くまでカットやパーマの練習。彼氏をつくる暇も出会いもない。遅くに帰宅し、コンビニで買った弁当を半分ほど残し、お風呂に入って寝る。この繰り返し。

今度の休みにたまには買い物に行こう。最近買い物もしてないや。

この当たり前の毎日に何か変化があるかもしれない。

良い人との出会いなんてあるわけないと思うけどね。

Last scene

あの後大輔とは、少し話して別れた。

やはり大輔は大手商社の営業マンになっていた。成績も優秀らしい。

最後の別れで「吾郎頑張れよ！」と笑顔で手を振って彼は電車に乗り込んだ。

わたしの小学生最後の夏休みの賭け。賭けに勝ったら告白しようとしたこと、大輔への気持ちは伝えなかった。

今ではそれでよかったと思っっている。忘れかけてたあの淡い思いでを思い起こしてくれただけでそれでいい。

大輔に会ってから心の余裕ができたのか、店長に3日間程の休みをもらって北海道へ里帰りしてきた。忙しい中3日も休みをくれるなんて後が怖いけど。

由実が家にいた。

小さい女の赤ん坊を抱いていた。二人目の子供らしい。

わたしを見て少しビックリしていたけど、案外普通に迎えられてこつちがビックリした。

やはり高校は退学していたが、ある程度授乳期が終われば保育園に子供を預けてパートに出るらしい。旦那も二つ上で若いので共働きでないと苦しいのだろう。

小学校最後の別れで由実がわたしに言いたかったことを聞いた。

由実も大輔が好きだった。そしてわたしが大輔を好きなことも知っていたらしい。

「由実は知ってたの？」

「うん。知ってた。吾郎ちゃんが女の子の心だって」

わたしも大輔のことが好きなのを知ってた由実は、必要以上に大輔に寄り添い、大輔に笑顔を向けた。わたしの心は女で、虫捕りが苦手なことを承知で夏休みの勝負を提案したこと。すべてわたしへの女の嫉妬だった。

別れの日、由実は最後にそれを謝りたかったのだ。でも悲しさと後ろめたさで伝えることができなかつたらしい。

でもうれしかった。その頃から由実はわたしを女として見ていてくれたのだ。

由実ありがとう。

もうすぐ北海道は雪景色に包まれるだろう。

雪が解け、夏にもし来れるようならまた来よう。あの神社の境内に行ってみよう。

できることならば……。

「ぼくと大輔と由実」で。

L a s t s c e n e (後書き)

これで終わりです。最後まで読んでくださった方ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6483p/>

ぼくと大輔と由実

2011年7月18日14時28分発行